



図1 日本産黒色種アミガサタケの主要3種  
(Mel 21、岩手県周辺分布種、北日本分布種)



図2 林床栽培試験



図3 林床栽培試験で発生した子実体



図4 ハウス栽培試験

# 岩手県内でのアミガサタケの栽培化に向けた取組



## 1 はじめに

アミガサタケの仲間(以下、「アミガサタケ」と記す)は、春先から初夏にかけて民家近くの樹木の周辺などに発生するきのこです(「岩手の林業」第750号)。全体では数十

種類あるとされますが、きのこ(子実体)の形状で黄色種と黒色種に大別されます。

アミガサタケは高級食材として知られ、黒色種の一部は、中華人民共和国(以下、「中国」と記す)など

で大規模に栽培されています。黒色種は岩手県を含む日本国内にも発生するため、県内でも栽培できる可能性があります。また、岩手県では、中国雲南省との交流事業を通じて、栽培に関する知見を習得してきました(同 第718号)。林業技術センターでは、これまでに菌株\*収集や栽培試験を進め、露地栽培での子実体発生に成功しました(同 第773号)。今回は、その後の取り組み内容についてお知らせします。

## 2 試料収集と種類の判別

\*子実体や胞子から菌糸を培地(栄養分を含む寒天)に伸ばしたものを指す

平成30年から令和4年に掛けて、国内各地から子実体224本(うち黒色種79本)を集め、菌株約2千個(うち黒色種975個)を得ました。また、岩手生物工学研究センターで子実体からDNAを抽出し、種類を調べた結果、日本の黒色種は、中国栽培種と同じ種(Mel 21)、岩手県周辺に分布する種、北日本に分布



図5 ハウス栽培試験で発生した子実体

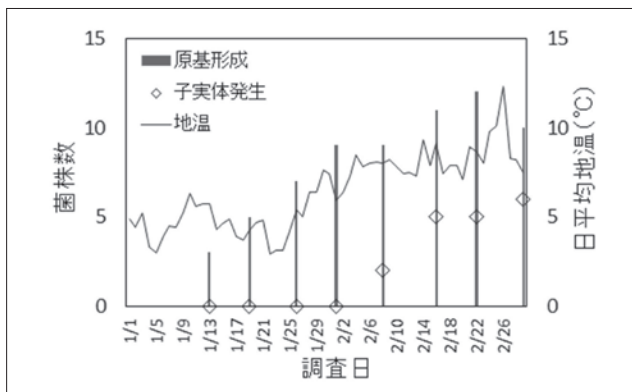


図6 原基形成、子実体発生、地温の推移



図7 共同栽培試験

する種の、少なくとも3種に分類されることがわかりました(図1)。これらのデータに基づき、栽培試験用の菌株を選びました。

### 3 栽培試験

① **林床栽培** 令和3年5月に、構内のヒノキ林(林齢29年、平均樹高13m、平均胸高直径22cm、立木密度3千本/ha)に5平方メートルの試験区を設定し、露地栽培と同じ菌株を植菌しました(図2)。露地栽培と同様

に管理した結果、翌年の3月に子実体が発生しました(図3)。子実体本数は125本(25本/平方メートル)、露地栽培の3本/平方メートルより増えたことから、林床の活用による栽培の効率化が期待できます。(研究成果速報No384)

② **ハウス栽培** 令和3年10月に、構内のビニールハウスへMe121を28菌株(うち県内産11菌株)植菌し(図4)、温度や湿度を管理した結果、

翌年の1月に地表で原基(芽のようなもの)を確認しました。その一部は子実体に生長し(図5)、最終的には6菌株(うち県内産1菌株)で子実体発生を確認できました(図6)。これらの結果から、ハウス利用による栽培期間の短縮や、県内産を含む複数の菌株の発育能力が確認できました。(研究成果速報No372)

③ **共同栽培試験** 令和3年から、県内の企業(きのこ栽培・加工・流

通業)と、栽培技術の実証や定着を目指して共同研究を行っています(図7)。これまでに露地やハウスで栽培試験を行ったところ、いずれも原基が形成され、その後の生長を観察しています。

### おわりに

これまでの取り組みから、日本産の菌株を用いた岩手県内でのアミガサタケの栽培化の可能性が示されましたが、安定的な栽培には優良菌株のさらなる確保が必要です。今年度も、主に黒色種のアミガサタケを集める予定ですので、子実体や情報、特に山火事やたき火の跡で発生したものがあれば、ぜひお寄せください。最後になりますが、子実体や情報をお寄せいただきました皆様と、雲南省の関係各位に、心より感謝を申し上げます。

林業技術センター 研究部  
成松 眞樹  
019(697)1536